様式Ｂ―１

平成２９年度「うるま市教育実践グランプリ　推薦部門」応募用紙

平成２９年度「**教育実践グランプリ　推薦部門**」に下記の者を推薦します。

うるま市立田場小学校
校長　稲嶺　盛幸　印

沖縄県うるま市立田場小学校長之印

ふりがな **応募者氏名** **（経験年数）**	こうち　きょうこ 幸地　　京子 経験年数（本務）１４年
所属学校（園）	〒904-2213 **住所**　　沖縄県うるま市田場８７６番地 **学校名**　うるま市立田場小学校 **電話**　098（973）3364　　FAX　098（974）7132
推薦の根拠 **（校長記載）**	＜活動内容＞ ○平成28年度～平成29年度　校内研究主任 【平成28年度】 ○道徳教育の重点内容項目の確認と別様作成の推進 ○各教科部会での道徳性を身につけさせる授業展開の工夫の確認 ○道徳タイムの設定（木曜日の清掃終了後10分間） ○一年次研究発表会（公開授業　６学年　道徳授業者） 【平成29年度】 ○提案授業（3つの研究内容の意識：①問いをもたせる授業づくり②ねらいと評価③支持的風土がある学級づくり）別添資料P5～P8 ○ねらいと評価の理論研修　　別添資料P10～P11） ○評価の着眼点・方法の確認・実践 ○二年次（最終年次）研究発表会（研究主任として二年間の研究報告） ＜推薦の根拠＞ 幸地教諭は、平成28年度・29年度の文部科学省指定「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」に係る校内研究の研究主任を務め、一年目は道徳教育に係る別様作成、各教科における道徳性を身につけさせる授業展開の工夫、最終年次は、道徳科において「ねらいと評価からの授業実践」を中心とした校内研究を推進した。 また、道徳教育を進める上で理論的研修をはじめ、全体を俯瞰した道徳教育の計画、日常的実践を計画的に進めるとともに、幸地教諭自身も積極的に授業を公開し授業でのポイントとなる場面や発問の工夫など、実践から裏付けられる資料や他教諭への助言は大きな推進力となった。 本校教諭への道徳授業の意識のアンケートでは、「昨年度より道徳授業実践を好きになった。」（平成29年度調査）が100％であったことからも、この二年間の研究は各教師の意識・実践力の向上にもつながった。これも、幸地教諭の「まとめる」（情報収集・情報提供）、「動かす」（方向性の確認・実践）、「育つ」（子どものために教師が共に取り組む）という先を見通した力と教育への情熱によるものが大きい。 今後も学校でのミドルリーダーと活躍できる人材であるとともに、地区・県の道徳教育推進で活躍が期待される人材でもあることから本教諭を推薦する。

テーマ　　豊かな道徳性を身につけた児童の育成

～協働して課題解決に取り組む校内研修を通して～

うるま市立田場小学校　教諭　幸地　京子

Ⅰ　はじめに

「道徳が教科化されても，子どもの道徳性を育てることや自己の生き方を見つめさせるという道徳教育の目標は変わらない」半年間，うるま市立教育研究所にて研究を通して見えてきたことである。これから先，子ども達や職員に研究したことを還元していこうと，希望を持ち現場に戻った私を迎えたのは，『文科省指定校としての校内研究主任』という責務であった。「私で本当に大丈夫だろうか。」と，不安で押しつぶされそうになったことを今でも鮮明に覚えている。
以下は，この二カ年間で田場小学校の校内研究で推進してきた内容の実践記録である。これまで行ってきた取り組みについてまとめ，報告を行うことで，さらなる実践意欲と授業改善へとつなぐ。

Ⅱ　テーマ設定の理由

国際化・情報化の進展により，著しく変化する社会状況のなか，児童を取り巻く環境も益々変化している。そのような変化の激しい社会を生きていくために，学習指導要領では「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」等の生きる力を育むことが求められている。また，次期学習指導要領では，新しい時代に必要となる資質・能力の育成を目指して，「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」がまとめられた。

平成 28 年度は，研究主題を「思考力・判断力・表現力を身につけた児童の育成」と掲げ，副題を「児童に道徳性を身につけさせる授業づくり」と設定し，児童に問いを持たせる働きかけの見直し，道徳の時間及びその他の教科・領域における道徳性を育成するための授業改善に取り組んできた。その結果，道徳と各教科との関連性や全教育活動を通して道徳性を培うことを教師が意識することで，自己開示ができる児童，自ら気づいて行動する児童，目標に向かって頑張る児童が増えてきた。また，教師自身の道徳に対する苦手意識や捉え方が柔軟になり，教師間の支持的風土が高まった。しかし，児童アンケート結果から，友達の前で自分の考えや意見を進んで発表する児童が約 6 割，教師のアンケート調査より，失敗を恐れずに挑戦したり物事を最後までやり遂げる児童は約 4 割という結果となり課題が残った。

この課題を解決するべく，まずはＡ　自分自身に関すること（希望と勇気，努力と強い意志）の重点内容項目をさらに重視して指導にあたることとした。次に，自分の考えや意見を進んで発表できるようにするための工夫として，問いを持たせる働きかけを行うとともに，他者と対話し協働しながらよりよい方向を見出させる交流の場を設定する。さらに，児童の授業における道徳的価値に対する深化・統合をみとるため，一単位時間における明確なねらいの設定と評価の一体化を図ることにより，課題の解決に当たれるのではないかと考えた。

以上のことを踏まえて，一人ひとりの子どもの学びや成長を促すための校内研究を構築させていく。研究主題に向かって，日常的に教職員間の協働意識を高め，指導にあたることを通して豊かな道徳性を身につけた児童の育成につながるのではないかと考え，本テーマを設定した。

Ⅲ　実践内容と工夫

【平成 28 年度】

（1）　研究内容の３つの柱の共通理解・確認
　「各教科・教育活動に置いて児童の道徳性を育てる授業を意識して行うことで心を耕す」
（2）道徳教育全体計画の見直しと重点内容項目の検討
（3）年間指導計画の作成と各教科との関連性を図った別葉の作成
（4）研究体制の確立（授業研究部，調査・学習環境部）
（5）　児童の実態把握（アンケートの実施・5 月，11 月）
（6）道徳教育の理論研究と授業研究会の実施
（7）講演会の実施（豊仁小学校　校長服部敬一氏）
（8）地域・保護者・関係機関との連携

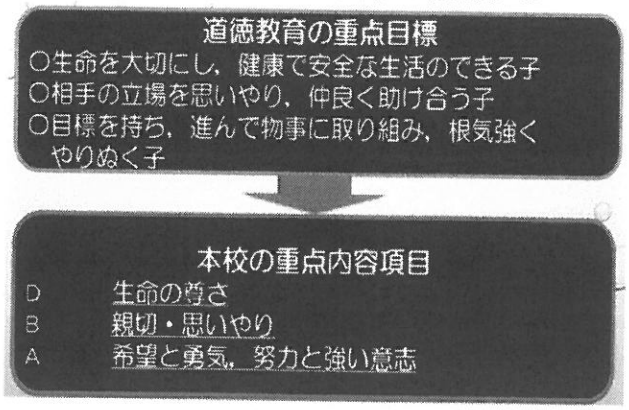
【平成 29 年度】

（1）　課題解決にむけての研究内容の３つの柱の共通理解・確認
　（「問いを持たせる授業づくり」「ねらいと評価」「支持的風土がある学級級づくり」）
（2）　年間指導計画・別葉の書き直し
（3）　研究体制の確立（授業研究部，調査・学習環境部）
（4）　新学習指導要領の視点と目指す授業像について
（5）　これからの道徳科の授業づくりと評価の在り方について
（6）　隣学年会や外部講師による授業研究会の実施
（7）　発達障害のある児童の道徳指導における困難と配慮について
（8）　研究報告書の作成と研究報告会の実施

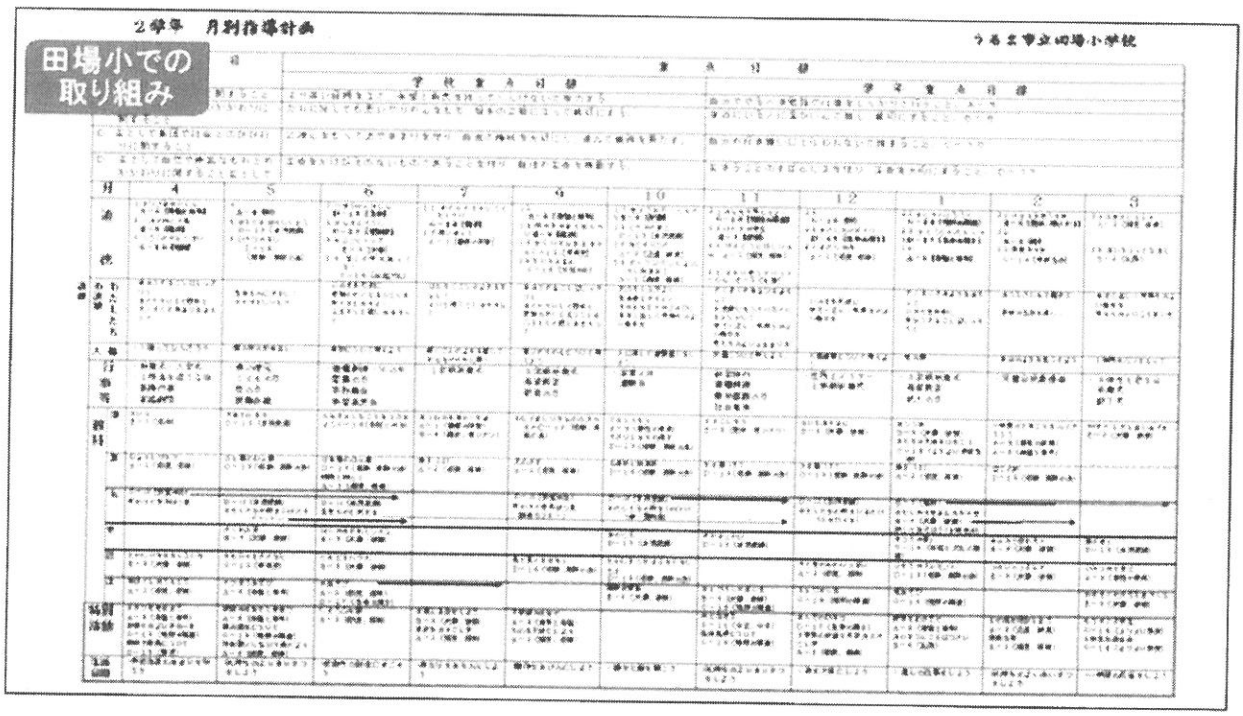
具体的な平成 28 年度の取り組み

1　道徳教育の重点内容項目を決定し，各教科との関連性を図った別葉を作成する

年度初めは，道徳部で集まりを持ち，学校教育目標から本校の道徳教育の重点目標の決定を行った。さらにそこから下ろし，本校の重点内容項目を決定した。この内容項目は各学年学期に１回，計３回行うこととなる。
道徳科における重点内容項目が明確となり指導にあたることで，児童の意識の継続化が期待され課題解決につながると考えた。

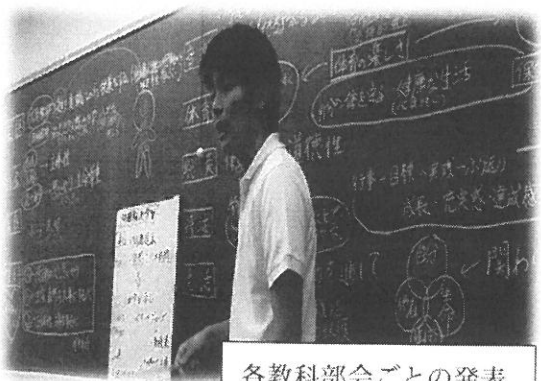


さらに，夏休みには全職員で別葉の作成に取り組んだ。別葉を見ると道徳の時間と各教科領域との関連がよくわかる。学校における道徳教育は道徳科が要として全教育活動を通じて行うことを基本としており，これを円滑に機能させていく為に道徳教育の全体計画がある。全体計画に記入しきれない内容については，全体計画とは別に作成して示すことが必要となり，これが別葉である。校内研修では，全職員で別葉のよさをしっかりと確認しあった。遠足の時は規則尊重，理科の生命の誕生では生命尊重というように学習指導要領を片手に持ち，より道徳的価値が持続できるように配慮しながら作成を行った。一から作成する作業は楽ではなかったが，学校全体で取り組むことで，他学年間の会話が増えただけでなく，全職員が道徳の内容と各教科領域との関連性について改めて気づくことができたことは大きな収穫であった。



2　「各教科・道徳における道徳性を身につけさせる授業展開の工夫」

各教科の中にある道徳性をどのように高めていくかの再確認を行う必要を感じたので、校内研修で各教科部会ごとに分かれて理論研修を行った。各教科の特質に応じた道徳性の育成について理論を深めていくなかで，各教科の中にはたくさんの道徳性が育つ要素が含まれていることを改めて理解することができた。例えば算数科において，問題解決に取り組むとき，自分の考えをしっかり持たせることが大切である。また，話し合いの際には他者の気持ちに寄り添って自分の考えを表現することも大切となってくる。これは、議論する道徳とも共通する事柄である。この研修では各教科・領域を通して培っていきたい道徳性がうきぼりとなり、日々の地道な積み重ねを続けることがいかに大切であるかという共通確認を持つことができた。


各教科部会ごとの発表

3　地域・保護者との関わり

読み聞かせボランティア

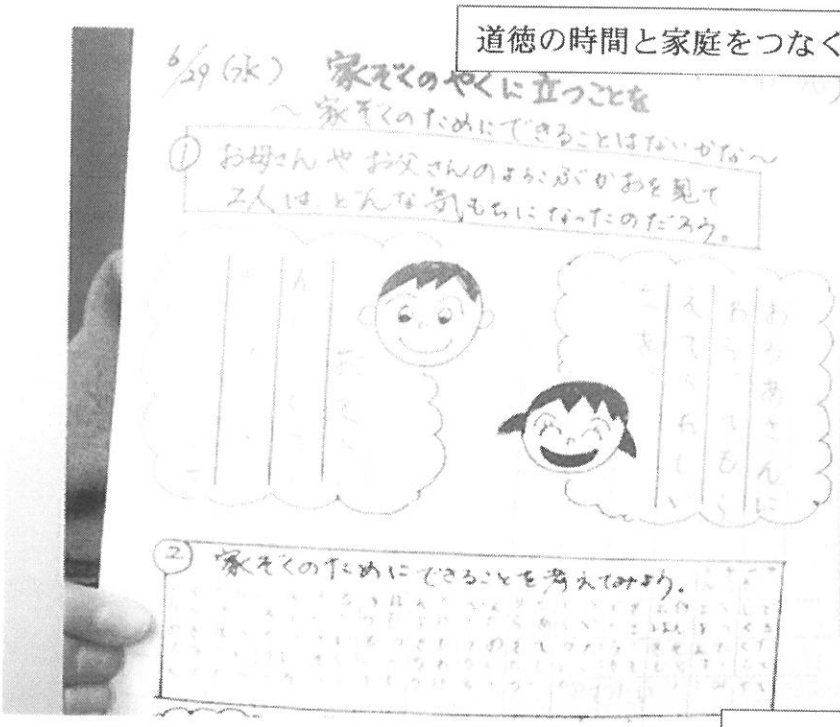
丸付けボランティア

親子工作

交通安全見守り

忘れてはならないのが，朝の読み聞かせや，○つけボランティア，毎朝の交通安全見守りボランティアなどの地域の方々との関わりである。「どうして自分たちのためにここまでしてくれるのだろう。」道徳の時間には，地域の人々の願いや思いについて考える学習を通して，気持ちの良いあいさつや笑顔を返す子ども達が増えた。近くで支え，温かく見守ってくれる優しさが子ども達の道徳性を培うことにつながっている。改めて感謝したい。

道徳の時間と家庭をつなぐ



道徳の時間で、どうしてお父さんやお母さんが喜んでくれるのかその理由について考える。

☆実生活において、自分が家族のためにできる事は何なのか考えてみる。

わたしたちの道徳の活用

道徳の時間と日常生活をつなぐ取り組みは，週１回の道徳タイムの時間を有効活用して行った。授業では主に道徳的価値について考えるのだが，家族と話し合ったことを紹介する活動を取り入れることで，子ども達は日常生活に目を向けることにつながると考える。日頃，家族についてあまり話をしない児童が嬉しそうに紹介をする姿を目にする度に，授業と家庭をつなぐことは児童の道徳的実践意欲につながるのだと実感することとなった。

4　1年次研究発表会

12月に行われた公開授業では，1年生の生活科の授業では感謝の気持ちをこめてお家の人へ手紙を書く姿，3年生の道徳では本当の友だちについて考え，自分にできる事をしようとする姿，5年生の理科からは体験活動を通して生命の誕生と成長の素晴らしさについて考える姿，6年生の道徳授業では相手の立場に立って考えて親切にすることの大切さに気づく姿が見られた。

私は6年の授業者であったが，子ども達が自由に意見を言い合える雰囲気の中，考えを豊かに深めていく姿が印象的であった。物怖じせず，どのような場面でも普段の自分たちの姿を出せる田場っ子のよさを実感したものである。

道徳の目標は「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め，道徳的実践力を育成するもの」だと定められているが，特別活動や総合的な学習の時間の目標と「自己の生き方について考える」という面では共通している。さらに内面に根ざした道徳性を育成するためにも，特別活動や総合的な学習の時間の活動をはじめ，各教科と道徳を関連付けて指導することがいかに大切であるか，子ども達の成長を目の当たりにして実感することとなった。

具体的な平成29年度の取り組み

5　授業実践例（提案授業より）

道徳の授業においては，主題にせまるために，目的意識を明確にした教師の働きかけについて3つの柱を連動させながら，年度初めより授業を行ってきた。5月には，他者と協働しながら主体的に学びを深めるための教師の働きかけを検証すべく，提案授業を行った。

（1）問いをもたせる授業づくり

授業では「なぜだろう。」「どうして。」と，子どもの内から生まれる疑問や関心を引き出す問いを持たせる授業づくりに努めている。子ども自身が自ら問いを持つと，「ここについて考えたいな。」「友達の意見を聞いてみたいな。」というように，主体的・対話的な深い学びにつながる。また，子

ども達が問題を解決するために，思考を働かせたり，他者との対話を通して多面的・多角的に自分の考えを深めたりするような話し合いとなるように，意図的・計画的に学習活動の展開を図っていくことが大切だと考える。本授業では，よりねらいとする価値について深く考えさせるために，補助発問や問い返しを行い，本当の親切思いやりとはなにかについて追求していく。

（2）ねらいと評価

今年度は，1時間で達成可能なねらいを設定することで，児童一人一人のよさや変容を見取るとともに，ねらいがどのように達成できたかを授業後のふりかえりで評価する。また，ねらいの達成を教師側から見ると，授業を展開する中でよりよい発問ができたかなど，授業の検証をするうえでの重要な指標になることにもつながる。本授業においては，発言や話し合いの様子の観察を行いながら，授業前と授業後の変容をふりかえり【道徳ノート】で評価することとなる。「本当の親切」について考え，議論したことを，自分の知識や経験に結び付け，これからの実践意欲へとつなげるような，生きて働く道徳性を培っていく。

（3）支持的風土がある学級づくり

支持的風土がある学級作りにおいて大切なことは，教師と児童の信頼関係，児童間の人間関係を築くこと，児童が安心して自分の思いや考えを表現でき，学びに向かう学習集団の形成を図ることであると考える。これまで，ペアやグループでの活動や児童同士の指名による発言を行うことで，子ども同士を意図的につなぎ，よりよい人間関係を築くように努めてきた。道徳の時間の「他者理解」の要素は，人間関係形成に大きく影響しており，他者理解の「自分の考えを持つこと」「他者の考えを聞くこと」「他者の考えと自分の考えを比べること」の作業は，お互いの考えを認め合ったり，それぞれの考えを素直に共有し，考えを広げ深めるたりすることができる学級でなければ成立しないと考える。日頃から授業の基盤となる支持的風土をつくる学級経営に努め，自己の生き方について考えよりよく生きようとする子ども達を育てていきたい。

（4）　本時の展開

①本時のねらい

親切とは，だれに対しても思いやりの心を持ち，自分の損得や見返りを期待しないで，相手の立場に立って行動することだと分かる。

授業前の児童の様子と考え方

・親切にするとほめられたり，お礼を言われたりするので，気持ちがよい。
・親切をすることは大切だけど，だれに対してもすることは難しい。

授業を通して高めたい考え方

・お礼を言われる等に関係無く相手のために行動することが，本当の親切なんだ。
・誰に対しても親切にすることは，自分や相手にとっても嬉しいだけでなく，周りの人たちまで優しい気持ちが繋がっていく。

②「めざす子どもの姿」の実現に向けた授業改善（教材・発問・問い返し・過程の工夫等）

場　面	工夫点（発問等）	子どもの姿
主体的に「問い」をもち自分なりの考えをもつ導入	実際の具体的な場面を想定して「親切」ということはどういうことか問いをもたせる。	これまでの経験を想起しながら，自身の問題意識を喚起し，本時の学習に対する構えを持ち始める。

他者との交流を通し「問い」が生まれ自分の考えを広げ深め		
展開前段ですてきなおくりものについて考え交流する	「3人に共通していることは。」と問いかけ，心の部分思いやりと行動親切について考えさせ，視覚的に見えやすい板書の工夫を行う。	親切とは，相手の立場に立って行動し，見返りを期待せずに自分のできる精一杯をやることに気付く。
学びの過程を振り返り新たな「問い」をもつ		
展開後段で，投書の意味について考え交流する	自分の考えを持たせ，話し合いを行うことで多面的・多角的に考えを深めさせる。	さらに親切についての価値を深め，今の自分をふり返り，親切な行いを引き継いでいこうとする意欲につなげる。

③展開

過程	学習活動と主な発問	子どもの予想される反応	指導上の留意点（手立て）
導入5分	1．実際の具体的な場面を想定して，親切にするということはどういうことかについて話し合う。	・相手のことを考えて行動することが親切だ。 ・知らない人には親切にすることは難しいな。	・親切にしたり，されたりしたときの気持ちを想起させ，価値への方向付けを行う。
展開前段15分	2　資料「すてきなおくりもの」を読んで考え話し合う。 ○すてきなおくりものとは，いったい何をあらわしているのだろう。 ≪問い返しや補助発問≫ ・この中で、親切なのはだれでしょうか。 ○3人に共通しているところは何かな。 ・お兄さんがもらったすてきなおくりものって何だろう ・トラックの運転手の困っているときはお互い様だという言葉を聞いてまり子は何を思ったのだろう。	・このお話には親切な人がたくさん出てくる。 ・お兄さんは助けてもらってみんなに感謝していると思う。 ・みんな，困っているお兄さんのために自分ができる精一杯のことをしている。 ・困っている相手には，見返りなど期待せずに助けてあげることが親切。	・資料の中にどのような親切があるか見つけながら読むように促し，観点を持たせる。 ・誰が親切なのかを決めるのではなく，それを考えさせることで「思いやりの心・親切のもと」について考えを深めていく。 ☆自分の損得や見返りを期待しないで，相手の立場に立って行動することが親切であることに気づかせる。 【価値理解】
後	○まり子はどうして，雨の日の	・自分達のとった親切な行動が，	・多面的・多角的に考え

段 1 5 分	できごとをいつまでも覚えていたいと思ったのでしょうか。 ・すてきなおくりものをもらったのはお兄さんだけかな。	相手を喜ばせるだけでなく，周りの人に広がったから。 ・親切は，人から人へと伝わっていくことに気づいたから。 ・私もこんなことがあったな。	を深め，親切な人について解釈したり，発言したりしながら,今の自分をふりかえらせていく。
終末	4．自己の学びを振り返り，感想を書く。	・困っている人がいたら，相手のことを考えて親切にしていきたい。	・書く時間を確保し，その後全員が発表できる場を工夫する。

④評価

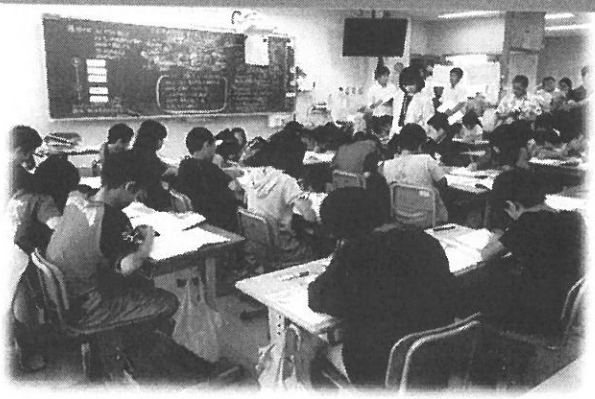
・親切とは，だれに対しても思いやりの心を持ち，自分の損得や見返りを期待しないで，相手の立場に立って行動することに気づくことができたか。

【授業の様子と考察】

視点１　「問いを持たせる授業づくり」

導入では，「この人たちに親切にしたことある？」クイズを行った。家族，友達，学年が違う子，近所の人，知らない人と項目を出していくと，目を輝かせて親切にしたことを想起しながらその時の気持ちを話し出す子ども達。しかし，知らない人に対しては，「親切にしたほうがいいとは思うけど，相手に対して恥ずかしさからなかなか行動には移せない。」「今は不審者もいるから怖い。」などという理由で，一番挙手が少なかった。そこで，「じゃあ,知らない人には親切にする必要はないのかな。」と，児童の発言から問いをもつことにつなげることにした。

他者と協働しながら主体的に学びを深めるための教師の働きかけについて検証する



展開前段では，「まり子も子どもなのに，自分にできることを考えてやっている」「知らない人でも，困ってる時には人として助け合うべきだ。」と自分だったらどうするかという視点で本時のねらいについて考えを深める姿が見られた。

問いを持たせる授業では、課題の提示の工夫によって子どもの「どうしてそうなのだろう」という問いを引き出すきっかけになったり発問の工夫や，場の設定を行うことで，児童の意欲の喚起につながり，そのことが「もっと知りたい」「自分はどうだろう」という，新たな「問い」を生み，学びを主体的に展開するいうことがみえてきた。

問いを持たせる授業とは

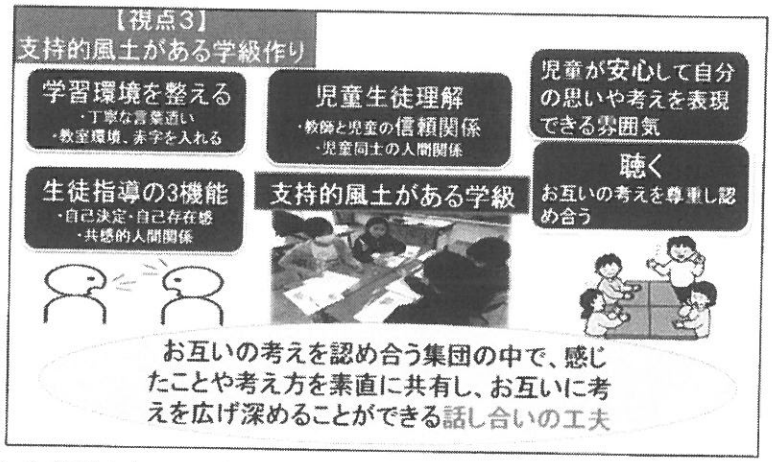
○子供の「問い」を引き出す課題の提示を工夫したり，発問の工夫や、他者との交流を通して自分の考えを吟味するなど、深い学びにつなげる場の設定を行う

↓

子どもの思考に寄り添い、気づきを価値づけることで、意欲を喚起し、新たな「問い」が生まれ、学びを主体的に展開することにつながる。

視点３　「支持的風土がある学級作り」

本校では昨年度から，集団作り・自主性を高める取り組みの充実として，支持的風土を醸成できるような学級経営に努めてきた。さらに，その要素を土台とし授業づくりにおいては，お互いに考えを広げ深めることができる話し合いの工夫を行っている。



展開後段では，「まり子はどうして雨の日の出来事をいつまでも覚えていたいと思ったのでしょう。」という中心発問を行い、グループで話し合い、全体で考えを共有した。子ども達の発表の中からは「今はまだ子どもでできることは少ないけど大きくなったら。」「親切にされたことは，忘れたくないから，自分も困っている人がいたら助けたいなと思った。」など，自我関与しながら意見を話すだけでなく，受容的な態度で自他の良さを認め、考えを深めていく姿が見られた。

Ｙ児は，考えていることはあるのだが，書く事が苦手である。しかし，グループでの話し合いの最中には，友達の話に耳を傾け，「それってみんな勇気があるってことだろう。」と付け加えをしていた。振り返りの時間では，『親切とは，思っていることを行動に移す事なんだと分かりました。今日の勉強をして知らない人や困っている人にも親切にしたいと思いました。』と，すぐに書き始め，感想を嬉しそうに友達と読み合っていた。

支持的風土がある学級を土台として，よりよい方向を見出させる話し合いの工夫を行えば，読み物教材の心情理解のみで終わったり，単なる生活体験の話し合いで終わることなく，多面的多角的に考えを深め，登場人物に自分を重ねながら道徳的価値の理解を深めることができることが分かった。

支持的風土がある学級では

○児童同士・教師と児童の信頼関係を構築し，安心して自分の思いや考えを表現できる学級の雰囲気づくりを行う。

↓

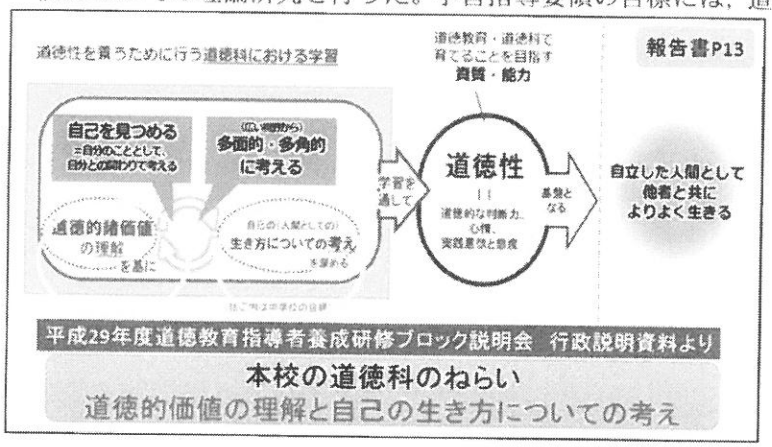
多面的・多角的に考えを深め、道徳的価値の理解が深まるとともに、自分自身の問題と捉え、向き合うことができる。

研究授業の翌朝のことである。学級に新しく入った椅子の調整を進んで行い，「やってあげるから持ってきて。」と友達に声をかけるＹ児の姿があった。その行動は見ていた友達へと広がり，「じゃあ自分も手伝うよ。」「終わったものは運んでくれる？」と，学級全体が見えない力で引き込まれているような雰囲気に包まれていた。朝の会で，「Ｙ児が自分で進んで行ったことは，昨日の道徳の時間のお父さんの親切と全く同じだと思った。」「親切にされると気持ちがいいって分かった。ありがとうって言われるからじゃなく，自分でやりたいって思ったから、手伝った。」「５年４組にも親切がつながってる！！」等，口々に話し出す子ども達の姿は誇らしげで，学級

の雰囲気が自分にできることをしようという実践意欲へつながっていることを証明しているかのようだった。道徳の授業が要となってよりよい学級や人間関係が構築されていく。Y 児のすばらしさだけでなく，友達の良いところを認め，もっといいクラスにしていこうという態度が自然に身につけるようになってきた子ども達の成長を大いに価値づけた１日となった。

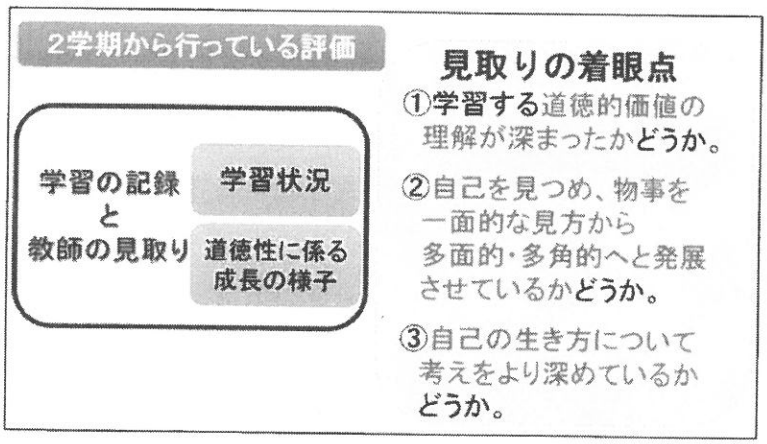
6　ねらいと評価について　視点３

１学期の検証授業では，まだまだ評価について見えない部分が多かったため，夏休みに校内研修で評価についての理論研究を行った。学習指導要領の目標には，道徳的価値の理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して道徳性を養うことが明確に示されている。道徳性を養うために行われる道徳科の学習では，道徳的価値の理解と自己の生き方についての考えといった要素によって支えられているため，そこを本校のねらいと設定しなおすこととした。

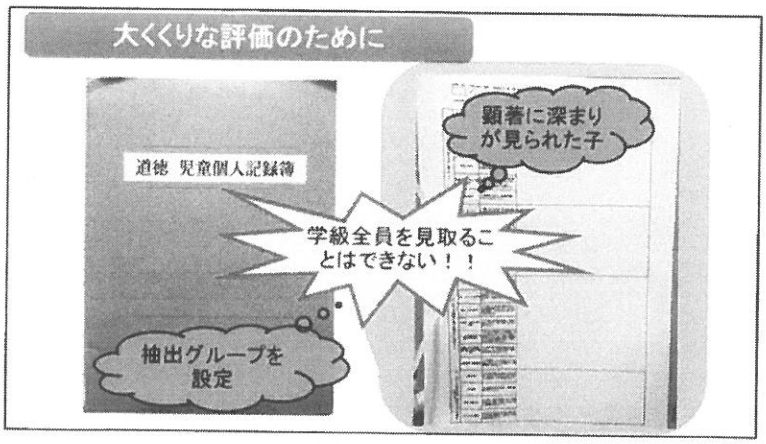


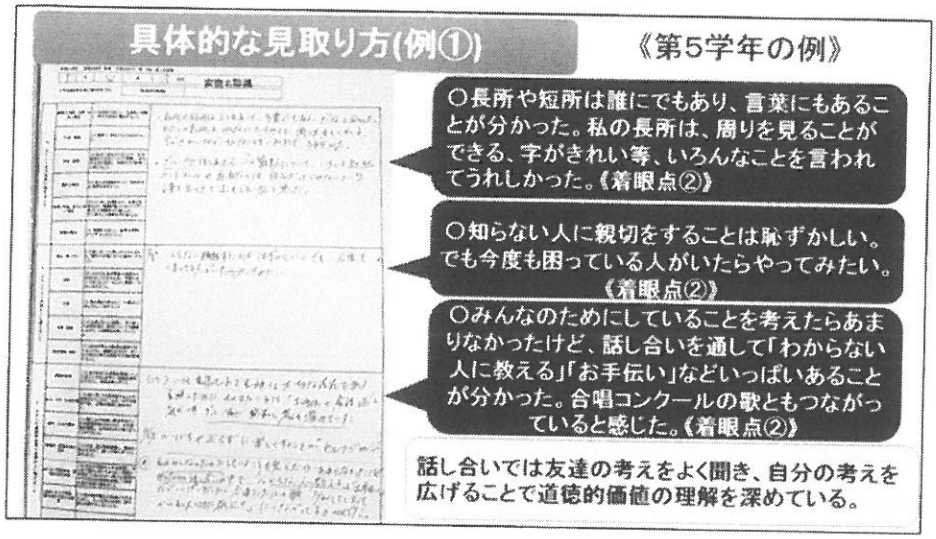
また，道徳科の評価では授業時間の「学習状況」と「道徳性に係る成長の様子」の２点を見取ることとなる。

その着眼点については，①道徳的価値の理解が深まったかどうか②自己を見つめ物事を一面的な見方から多面的多角的へと発展させているかどうか③自己の生き方について考えをより深めているかどうかの 3 つのポイントで見取ることとした。



さらに，大くくりな評価を行うために，２学期から道徳の児童個人記録簿を作成することとなった。毎時間，学級全員を見取ることは不可能なので，顕著に深まりが見られた子や抽出グループを設定することにしている。記載内容は道徳ノートやワークシートのほか，観察や，授業後の面接等により，抽出児を決めて子ども達の良さを見取るようにして行われている。





例えばこの児童は，普段の発言は少ないものの話し合い活動になると生き生きと活動をし，友達の考えから自分の考えを広げることができていることが分かる。個人記録簿に記載していくことで，友達の発言を積極的に受け入れ，多様な見方に対する理解を深めていることが分かり，一面的な見方から多面的・多角的な見方へと道徳的価値の理解を深めているといった大くくりな視点で評価を行うことができると考える。これからも検討を重ね，子ども達のよさを生かす評価に努めたい。

今年度は実際によいこのあゆみに道徳の評価の記載を行った。よいこのあゆみは，子どもや保護者にとって具体的にわかりやすく，その学習を想起できるものを記述し，児童の成長を伝えたいという理由から，より顕著な成長がみられたものを児童の振り返りを基に記述している。「我が子がこのような考えを持っていると知れて嬉しい。道徳の時間の内容は家でも話し合うことがある。」という保護者からの声もあった。

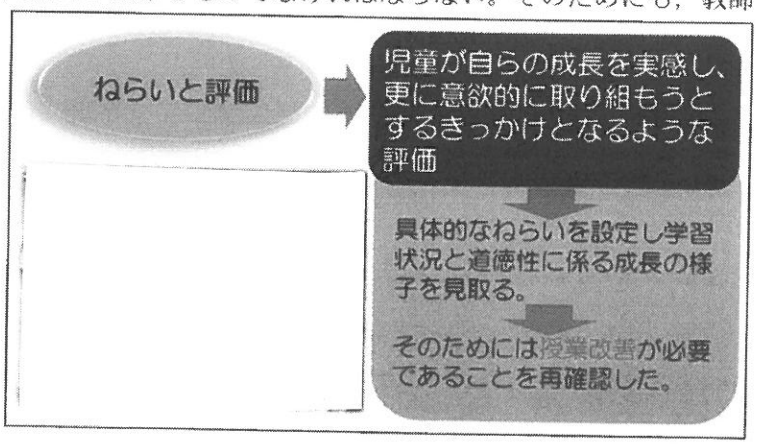
よいこのあゆみ　記載例

振り返り	○いのちって本当に大切で，誕生日のときにはママやパパも大きくなってうれしいんだな～と思いました。これからも自分の命だけじゃなく，人の命も大切にしたいです。
評価文(例)	○学期を通して，話し合いの中で友達の考えをよく聞き，自分自身の考えを深めることができました。誕生日の授業では，命は大切で，誕生日の時は，家族まで嬉しくなること。これからも自分の命だけでなく，人の命も大切にしたいと，感想につづっていました。

授業後に，児童のノートを振り返り，何人がねらいとする価値に気づいているか調べることからスタートした田場小学校での道徳の評価。様々な研修，検証を重ねながら，はっきりと見えてきたものがある。それは，子ども達のよさに向かう心を後押しするために評価を行うということである。

評価は児童の良い面を認め，意欲の向上につなげるものでなければならない。そのためにも，教師は，児童に寄り添い，意義付けや励ましを日々行いながら，様々な評価の方法を試していく必要があると考える。

児童が自らの成長を実感し，さらに意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を行うためにも，改めて授業改善が必要であることを全職員で再確認することができた。



7　最終年次発表会

12月6日の最終年次研究発表会では，300人以上の来校者を迎え，学年・学校が一体となった学びの深い1日であった。この日を迎えるにあたって，着実に道徳の授業実践を積み重ね，研究報告書も計画的に作成を行った。授業研究会では，どの学年も子ども達と授業者が，授業のねらいである道徳的価値について精一杯考え，よりよい生き方につなげていく前向きな姿が見られた。同様に，授業研究会，全体会も来校者アンケートから内容がとてもよく，もっと時間がほしかったとの声もあがった。参観された先生方もまた，メモを取りながら熱心に発表を聞く姿が見られ，興味・関心の高さと同様にこれから教科化となる道徳の授業改善に向けて真摯に向き合っていこうという姿勢が窺えた。特に，特別支援学級の公開授業については，参観者からの関心も高く，その中でユニバーサルデザインの授業が各学級の発達障害児への支援や配慮につながることを感じ取ってもらえたのではないかと思う。

私たちの迷いや疑問に寄り添い，支えていただいた各学年の講師の先生方に深く感謝すると共に，研究を支え合った全職員の協働体制のすばらしさ，当日に向けておもてなしの準備を行い，心温まる心配りで来校者を迎え入れてくださった事務部やPTAの皆様方の協力なくして，この発表会は成功できなかった。改めて感謝申し上げたい。

【6学年児童　振り返りより】

「夢・目標・それに向かって」という授業をしました。やっぱり人間は,自分がやりたい事・好きな事をしている時の姿が美しいんだなと思いました。自分がやりたい事を将来やっていたら嬉しいです。そのために何を今すべきか,何をしたらいいのかを考えながら今を生きていきたいです。自分が夢に向かって生きていられるのもいろんな人たちの支えがあるからだと知りました。

5学年授業研究会

3学年授業「親切・思いやり」

全体研究会

PTA　田場カフェオープン♪

Ⅳ　成果と課題

【成果】

○児童アンケートからは，人の気持ちを考えたり友達の考えを聞いたりするのが好き等の理由から，約８割が道徳の授業を好きだという結果が出た。また，昨年度よりも道徳の授業実践をすることが好きな教師が増えた。（100％）その理由として，学年会で道徳の授業づくりについて話し合う場を持ったり，お互いの授業を見合ったりすることで道徳の授業を実践することに対して少しずつ自信を持てるようになったことを挙げていた。

○道徳タイムや道徳のあしあと等の学校全体での取り組みは、児童が自分自身の良さを感じたり，友達とのつながりを深める上でもとても効果的であり，児童の道徳性の育成につながっている。

【課題】

○想いを書き表したり，発表したりすることが苦手な子どもへの継続的な手立てを引き続き行っていく必要がある。

○多面的・多角的な見方が身につく話し合いや学び合いの工夫については，他教科との関連を図りながら系統的に行っていく必要がある。学校行事と他教科との関連を図り，道徳的実践意欲につなげるように常に意識して指導にあたる。

Ⅴ　終わりに

研究主任になった時，親しい先輩教師から『校内研究の質は研究主任の意識で大きく変わる』とアドバイスをされたことがある。研究を推進していく中で，本校の課題をいつでも明確に持ってその課題解決に向かうこと，また県内県外での道徳の動向の情報収集にあたり，『校内研だより』を通して，具体的に目に見える形で全職員で共有を行うことに心がけた。さらに，若手や先輩教師と常に会話を行い，学年での雰囲気や，悩みを探り絶えず校内の声に耳を傾けるように努めた。研究主任としての日々は，大変なこともあったが，そのような時はいつも支え，励ましてくださった校長先生や教頭先生，同僚，つながっている諸先生方の姿があった。何よりも，志を持ってやり遂げることができたのも，いつも私を慕いやる気の原動力となった田場っ子達が近くにいてくれたからである。子ども達には心から感謝したい。

４月に大石先生から「研究指定校として，日々子ども達のために研究していこう。」と頂いた言葉は、12 月には労いの言葉と共に「継続すること」の大切さへと変化しており，改めて教師としての在るべき姿を見つめなおした。私たちの研究はこれからも続いていく。チーム田場の合言葉でもある“目の前の子ども達のため”に。

《参考文献》

・小学校学習指導要領解説　特別の教科道徳編　　平成 29 年 6 月　文部科学省
・子どもに寄り添う道徳の評価　　平成 29 年　加藤宜行編著光文書院
・沖縄県学力向上推進プロジェクト　　平成 28 年 12 月　沖縄県教育委員会

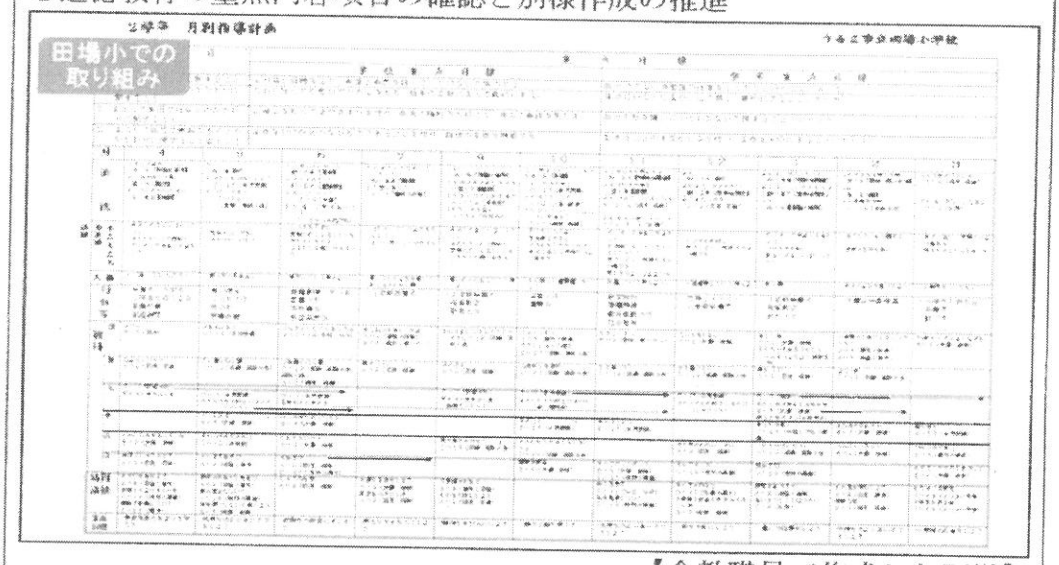
様式Ｂ－２

教師の活動の概要

＜教師の活動と成果＞

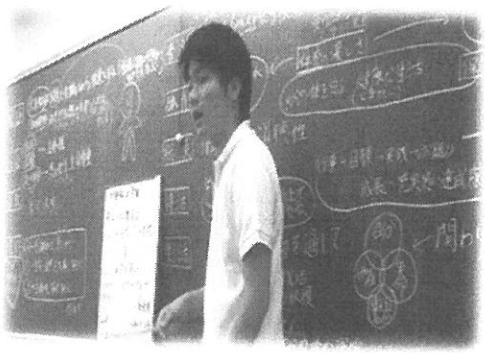
【平成28年度】

○道徳教育の重点内容項目の確認と別様作成の推進



【全教職員で作成した別様】

○各教科部会での道徳性を身につけさせる授業展開の工夫の確認

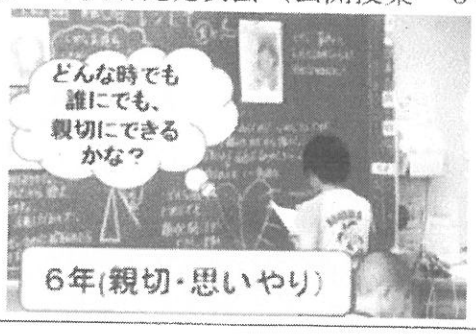


各教科から道徳性を高めていくために、どのような視点で授業実践を進めていくかの確認の場となった。【各部会の話し合い後に、全職員で確認】

○道徳タイムの設定（木曜日の清掃終了後10分間）

道徳の時間と日常生活をつなぐ取り組みは，週一回の道徳タイムの時間を有効活用して行った。家族と話し合ったことを紹介したり、関連する読み物を読み聞かせたりする活動を取り入れることで，子ども達は日常生活に目を向けることにつながった。

○一年次研究発表会（公開授業　６学年　道徳授業者）

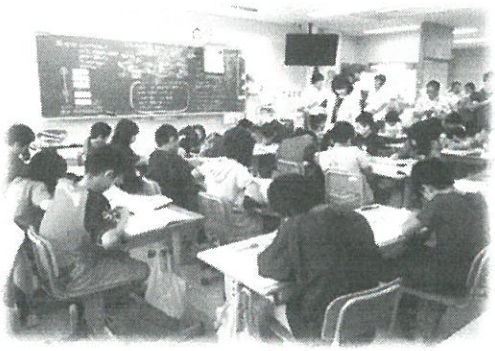


自身の授業を公開し、支持的風土のある学級づくり・学級経営が道徳をはじめ各教科での主体的・対話的な学びへつながるために大事であること、道徳性を育成するためには各教科と関連させて指導する大切さを観てもらった。

【平成29年度】

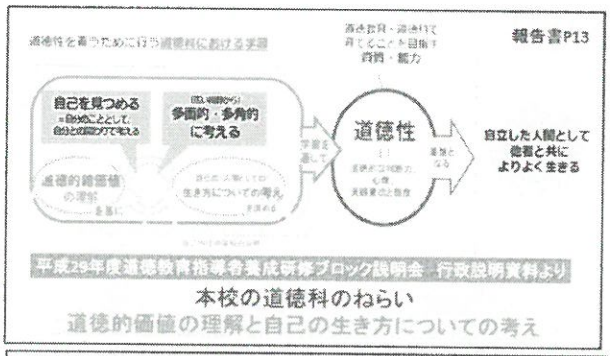
○提案授業

（3つの研究内容の意識：①問いをもたせる授業づくり②ねらいと評価③支持的風土がある学級づくり）別添資料P5～P8

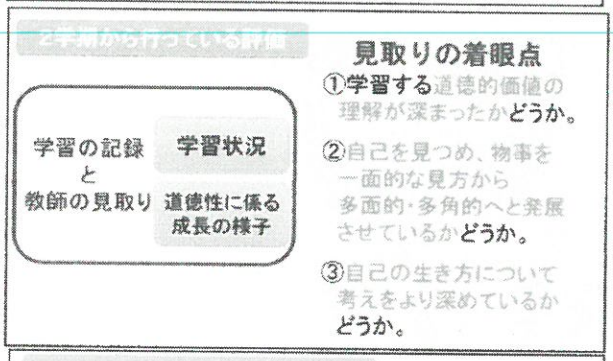


○ねらいと評価の理論研修、評価の着眼点・方法の確認・実践

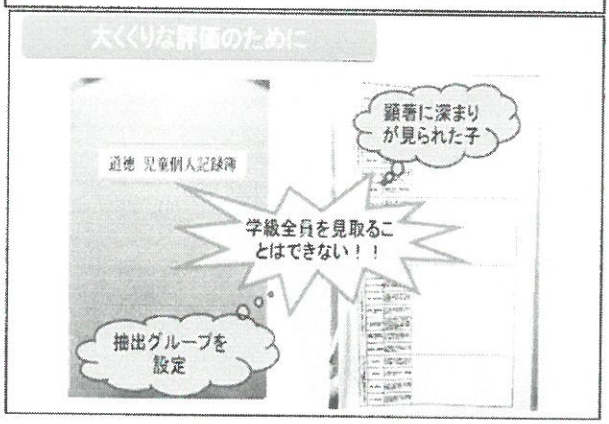
（別添資料P10～P11）



当初、授業の評価を道徳的価値が深まりに重点をおいておたが、道徳性を高めるという視点で①道徳的価値の理解が深まったかどうか②自己を見つめ物事を一面的な見方から多面的多角的へと発展させているかどうか



③自己の生き方について考えをより深めているかどうかの3つのポイントで見取ることとした。



大くくりな評価を行うために，2学期から道徳の児童個人記録簿を作成することとなった。毎時間，学級全員を見取ることは不可能なので，顕著に深まりが見られた子や抽出グループを設定することにしている。記載内容は道徳ノートやワークシートのほか，観察や，授業後の面接等により，抽出児を決めて子ども達の良さを見取るようにして行われている。

○二年次（最終年次）研究発表会（研究主任として二年間の研究報告